

本は友達、そして先生

私は、学校訪問した際、なるべく学校図書館（図書室ではない）に立ち寄るようにしている。最近の学校図書館は、学校司書さんのご尽力により、「本のおすすめコーナー」等の展示コーナーがあり、訪れる者の目を楽しませてくれる。私が子どもの頃のやや殺風景な図書館ではなく、訪れる者が自然と本を読みたい、本で調べてみたいと思うように工夫されている。

小中学校の図書館蔵書は、9類（文学）の割合が高いので、0類（総記）～8類（言語）までの充実ぶりはどうかと本棚に目をやる。時間が許せば、学校司書さんに子ども達の図書館活用の様子や読書傾向を尋ね、それとこの学校の教育目標や研究科目（テーマ）と関連付けて考えてしまう。20年前から国や自治体の読書推進の取組により、小中学生の読書量が増加し、小中高校生の不読者が減少しているという。それは、「全校一斉読書」「朝読」等の読書習慣の確立と学校司書配置の効果が大きいと考えられる。

子どもの頃の読書量が多い人は、意識・非認知能力や認知機能が高い傾向にあり、教科書等に書かれた文章の意味を理解する力があるという報告がある。又、全国学力・学習状況調査によると、小中学校ともに家庭の蔵書数が多い児童生徒ほど、平均正答率が高い傾向があるという。私は担任時代、家庭訪問に行った際、家庭での蔵書状態を見たり読書習慣について質問したりし、家庭での読書環境を知るようにしていた。家庭環境の違いを克服して児童生徒が等しく多種多様な本と出会い、本好きで本を活用できるよう保障することが学校教育、学校図書館の役割であると先輩教員から教えられていたからである。

さて、私は幼い頃、「コンバット」という番組の中でサングラス軍曹が持っていた機関銃が欲しくて欲しくてたまらず、デパートの玩具売り場で買ってもらうとうその場を離れず泣き叫んでいた。その後、親にその場から無理矢理引き離され、絵本売り場に連れていかれた。家には、親の蔵書は殆どなかったが、徐々に私の本は増えていった。親は、私が欲しいと言った参考書や問題集、高価な百科事典までも揃えてくれた。私の家庭

伊藤 陽一（本学教職研究科准教授 教育学）

は決して裕福ではなかったがそんな家庭であった。

私が小学校の頃に夢中になって読んでいたのは、伝記とアルセーヌ・ルパン全集（特に「奇巖城」）だった。中高になると部活一筋の生活となり、本を読む機会はぐっと減っていった。それでも、高校時代の部活は、定期試験一週間前から休部となり、その一週間は読書三昧であった。国語科や社会科の先生からお薦めの本を教えてもらって読んでいた。「されどわれらが日々」「人間の壁」「橋のない川」といった本が印象に残っている。そのお陰で、試験の成績は散々であり、私の読書はただ試験勉強から逃避するためのものだった。

大学生となり、専門書を読むようになった。判例に関する専門書は面白かったが、条文中心の本は退屈極まりなかった。専門書以外の読書は、ノンフィクションや随筆に傾いていった。その契機は、先輩から薦めてもらった「テロルの決算」という本との出会いだった。

そして、教員になってからは研究授業前に実践事例集等を読んで教材研究をしていた。読書と言えば、教育関係図書ばかりであった。その中で一番影響を受けたのが、大村はま著「灯し続ける言葉」「教えるということ」で、特に「仏様が、ちょっと指で車に触れられました」という話には、大きな衝撃を受けた。これは、私の教育観・指導観を180度変えることとなった。実際には、その話のような教師には到底なれなかったが、私の中での意識は大きく変わり今も大切にしている。

妹尾昌俊著「教師崩壊」の中で、教師の一か月の読書量は、小学校教師の約3割、中高の教師の約4割以上が「0冊」というデータを示している。多忙の中、教師は精々教科書と指導書しか本と向き合うことなく、自らの学びを放棄し知識や教養のアップデートができていないと指摘している。だが、私が今まで尊敬してきた先生方は、読書の意義を理解し実践されていた。

言うまでもなく本は対話可能な友達であり先生である。教師（教師を志す人）にとって大事なことは、時々本屋や図書館へ行き、本を見、自分で本を選ぶこと。多様な考えの他者からお薦めの本の情報を得て、友達であり先生となり得る本を選択し、本を読むこと。それこそが教師に求められる発想力の源である。